

愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻

金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程 永田 明

生体ドナーの心理

本稿は、メディカ出版「いのちを伝える臓器移植看護」の永田が執筆担当した p122-127 の原稿に加筆・修正を加えたものです。

移植が決まるまでの心理

【移植に至る経緯】

移植患者は様々な経緯をたどって移植の必要な状態となる。先天性の疾患を持つ子を産んだ親は、長い間、罪悪感や贖罪感を持ち続けている。慢性的に長期間の療養生活を支えてきた家族は、患者を助けたいという感情とともに、療養生活に疲れ果てこの生活を終わらせたいという感情が存在していることもある。また、劇症型肝炎など急激に生命が危険な状態に陥った患者の家族は、家族自身も危機的となっており、患者を助けたいという思いが強く医療者側の説明を十分に受け止めることができないこともある。

【誰がドナーになるのか】

生体移植のドナーは周囲の人々のさまざまな思いの中で意思決定をする必要があり、この意思決定プロセスの中で家族の中に潜んでいた葛藤が現れることがある。

“家”のつながりが強い日本においては、移植を受ける家族だけでなく血縁のある一族も巻き込み、それぞれの思惑の違いによって苦悩するドナーの存在も、筆者の研究¹⁾で明らかになっている。

周囲のプレッシャーによってドナーとなった者は、被害感や敵意、攻撃的感情をもつ例もあり、移植患者や家族に対して大きな影響を与える。親から子への移植や配偶者間の移植の場合、周囲から「臓器を提供するのは当然だ」と思われがちであるが、そのことを大きなプレッシャーと感じてしまう。

【移植に対する期待】

ドナーになる者は移植の成功を願って臓器提供をするのだが、その願いが非常に大きなものとなり、移植への期待は“命を助ける”という目的以外にかけられる場合がある。ドナーがレシピエントに抱き続けていた心理的葛藤が影響する例もあり、恩返しの感情や無意識のうちに持っていた罪悪感などが影響する場合もある。このような場合は、自らドナーになることを申し出るケースが多い。

移植前のドナーの心理

【気持ちの昂ぶり】

ドナーになると決めた者は手術前に、気持ちの昂ぶりを経験することがある。Walter²⁾の研究では、術前のドナーは健康な対照群と比較して総合的な QOL は高く、身体的愁訴は少ないという報告もある。

【手術前の不安】

ドナーは手術前にはさまざまな不安を持っている。しかし、移植を行ってほしいという願いが強いあまりに、ドナーは不安にならないように情報を選択的にとらえ詳細を理解しない行動が見られる場合もある。Fukunishi³⁾は、生体ドナーは術前の強いストレス状況野の中で、アレキシサイミアの傾向を示すとして、明らかな不安を示さないドナーに対しても観察の必要性を説いている。

※アレキシサイミア (Alexithymia)：自らの内的体験や感情を認識したり、言語化して表現することが制約された状態。

【アンビバレントな感情】

ドナーは、臓器を提供し患者を助けることから得られる満足感と、多くの不安が同時に起こるアンビバレンスを体験する。これは臓器を提供したいという感情と提供したくないという感情が存在する。

しかし、これらの感情も前述したようなことから、その時の感情として表出されることが少ない。

移植後のドナーの心理

【無力感と喪失体験】

移植後に無力感や喪失体験をするドナーが存在する。例えば、家族との関係修復を期待してドナーになったが、移植後も関係がよくならなかったことから無力感を抱き、また、長期間にわたって療養生活を支えてきたドナーは、患者が移植によって健康を取り戻すことにより、自らの役割を見失い喪失感を抱くことがある。

移植が成功し順調な経過をたどったレシピエントに見られる、抑うつ、身体化障害、適応障害などを“逆説的精神症状”と呼び、生体ドナーにも同じようなことが見られる場合がある。

※逆説的精神症状（Paradoxical Psychiatric Syndrome）：移植が成功し、順調な経過をたどったレシピエントに見られる抑うつ、身体化障害、適応障害などの精神症状、術後の経過が良好でも、心理的な葛藤により不安定になる。

【レシピエントの経過に対する感情】

臓器を提供したドナーは、レシピエントの経過を特別な感情を持ってみている。レシピエントの経過を見て体調の憎悪軽快に合わせて、ドナーの気分や体調が変化することがある。野間⁴⁾は、“ドナー側のシャム双生児効果”と表現している。

【終わりのない移植】

移植後のレシピエントは、免疫抑制剤を服用し続け感染が起こらないように生活を改善し、拒絶反応の観察を続けなければならない。移植は「終わりのない医療」だと表現される。生体移植の場合、レシピエントとドナーの生活圏は重なっており、レシピエントの経過がドナーに大きな影響を与える。

※シャム双生児効果：ドナーの身体状態をレシピエントが同じように体験する現象

【ノンドナー】

ドナーの候補になりながらドナーにならなかったものを、「ノンドナー」と呼ぶ。以前よりノンドナーの存在について話題にされることが少なかったが、「ドナーになれなかった」または「ドナーにならずに済んだ」という気持ちがあり、レシピエントやドナーに対して後ろめたさや罪悪感を抱いている可能性がある。野間⁵⁾は、ノンドナーは医療の現場に直接は姿を現さないためにその問題は見えにくい、さらなる配慮や支援が必要であることを説いている。

引用・参考文献

- 1) 永田明. 生体肝移植ドナーの体験. 日本赤十字看護大学大学院修士論文. 2004
- 2) Wakter, M et al. Psychosocial data of potential living donor before living donor liver transplantation. Clin Transplant. 16, 2002, 55-99
- 3) Fukunishi, I. et al. Alexithymia Characteristics Before and After Living Donor Transplantation. Transplant. 35, 2003, 296.
- 4) 野間俊一ほか. ドナーの精神的負担. 肝胆膵. 50. 2005. 155-166
- 5) 野間俊一ほか. 生体肝移植ドナーの精神医学的諸問題. 臨床消化器内科, 20,1971,1185-1188